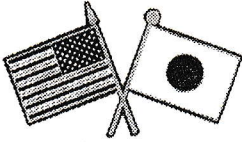


27 NOV 2006



第30号

日米エアフォース友好協会

だより

Japan America AF Goodwill Association

発行：日米エアフォース友好協会

〒105-0004 港区新橋 5-25-1-3

編集：JAAGA事務局

印刷：財団法人 防衛弘済会

ホームページ：http://www.jaaga.jp/

協会創立10周年記念行事

— 7月11日（火）グランドヒル市ヶ谷にて盛大に開催 —



F-15s formation near Mt.Fuji

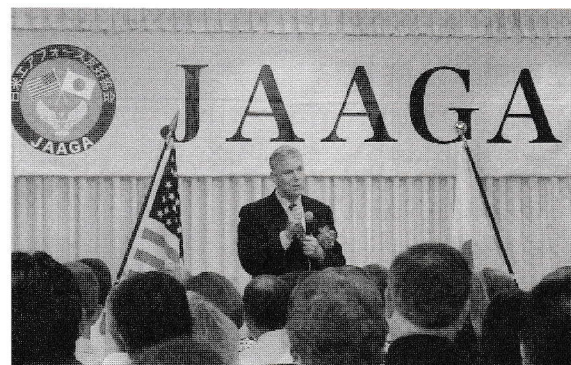
平成8年7月5日に創立されたJAAGAは、歴代会長、理事、会員諸氏等の献身的な努力と支援により、航空自衛隊と在日米空軍の相互理解と友好親善はもとより、各種の企画を通じてわが国の安全保障の確立に寄与してきたが、このたび10周年を迎え創立記念行事が平成18年7月11日（火）、防衛庁副長官をはじめとし、国会議員、外務省・防衛庁・航空自衛隊・在日米空軍の要人、その他多数の来賓をお招きし、約120名の JAAGA会員参加のもと、グランドヒル市ヶ谷において盛大に行われた。

「JAAGA発足10周年という節目にあたり、これまでにおける活動の実績を確認し、会員一同の団結の強化を図り、さらなる発展を期すため、記念行事を実施するとともに日米の関係者を招待して JAAGAの活動に対する御理解ならびに両国の信頼関係の増進に資する」という趣旨のもと、記念講演会、感謝状贈呈式、祝賀会、そして、今回初の試みの企

業展示が行われた。

記念講演会

会員、防衛庁・自衛隊関係者及び米軍人等の招待者、約250名の聴衆のもと、前米国統合参謀会議議長マイヤーズ元空軍大将の「The Threat from Violent Extremism—WWX（暴力的過激主義の脅威—



Memorial lecture by Gen.Myers

WWX)」と題する約1時間の講演が行われた。豊富な経験、特に9.11テロ以降の体験談と識見溢れる内容であり、JAAGA10周年に相応しいものとなった。今後の日米関係、そして国際社会を考える上に於いて的確な示唆を頂いた。ユーモアに溢れ、豊富な話題であり、約1時間を飽きさせず、聴衆を魅了する講演となった。なお、マイヤーズ大將は7月12日、佐藤行雄日本国際問題研究所理事長が座長を務めるJIIAフォーラムにて「世界の安全保障環境」と題して講演を実施された。(講演内容は3ページ、講演者紹介は7ページ)

感謝状贈呈式

JAAGA創立以来、特にその発展に貢献されてきた日米の個人4名(石川吉夫氏、坂本祐助氏、サールス・昌子女氏、ハワード黒田氏)と3法人(川崎重工業株式会社、三菱重工業株式会社、三菱電機株式会社)に対して、会長から感謝状と記念品が贈呈された。(会長挨拶は、7ページ)



Recipients, letter of appreciation

祝賀会

木村防衛庁副長官、外務省北米局審議官、防衛庁内部部局代表、吉田航空幕僚長、防衛庁附属各機関・航空幕僚監部・航空自衛隊各部隊の代表、また米国側からは在日米軍司令官ライト中將ご夫妻等米空軍関係者、講師のマイヤーズ大將、そして関係団体等からは山本JANAF(日米ネービー友好協会)会長、杉山新生つばさ会会長、佐藤日本国際問題研究所理事長等、約120名の来賓の出席をいただき、約300名の盛大な祝賀会となった。冒頭、日米両国の国歌を斉唱し、竹河内会長の挨拶、木村防衛庁副長官・

吉田航空幕僚長・ライト在日米軍司令官・マイヤーズ前米統参議長から祝辞があり、額賀防衛庁長官からの祝電が披露され、杉山新生つばさ会会長の音頭での乾杯で祝宴となった。アトラクションに航空自衛隊中央音楽隊のメンバーによる演奏が行われた。日米友好に相応しい曲目が演奏され親善の気運を高めた。来賓の方々が日米の参加者と親しく懇談され、また旧知の日米関係者の間では思い出話の花が咲くなど、終始和やかな雰囲気とエネルギーな空気が会場を包んだ。20時半、山口JAAGA副会長の乾杯で祝宴は締めくくられ、2時間があっという間に過ぎ、また余韻を残して閉会した。(会長挨拶は、8ページ)

企業展示

JAAGA法人会員の19社が各社ごとに企業活動の紹介、製品説明の資料展示、航空機の大型模型等の展示を行った。今回が初めての試みであったが、各企業も積極的に出展し、かつ展示内容が充実しておりJAAGA10周年記念行事に花を添えた。近隣基地からの現役も含め多くの見学者が訪れ、13時から5時間半にわたる展示であったが、関係者のご努力により、成功裏に幕を閉じた。

本記念行事を通じて、参加者には、改めてJAAGAの意義とその役割に理解を深めていただき、加えて本記念行事がJAAGAの更なる発展、飛躍の礎になったものと確信する。(源 常務理事記)



Displays by associate members

JAAGA10周年記念講演

The Threat from Violent Extremism—WWX (暴力的過激主義の脅威・世界大戦WWX)



講師：前米統合参謀本部議長
リチャード・B・マイヤーズ空軍大将

本日は、JAAGA10周年記念をご一緒に祝う一人としてお招きいただきまして、ありがとうございます。この祝賀の場にご一緒できることを本当に喜ばしく思います。妻とここに来る車中で、日本で過ごした時間をいろいろ思い出していました。1996年に日本を去り、その後10年、世界の全ての国とは申しませんが、多くの国に足を運びました。しかし、優雅で、温かく、そして誠意のこもったおもてなしを受けることができる国は日本しかないと感じております。その日本で皆さまと再びお会いし、ご一緒にお祝いできることを嬉しく思います。

JAAGAの10周年記念を誰が想像したでしょう。11年前のことになりますが、たくさんの方がこの種をお蒔きになり、それが檜の木のように大きく育ち、非常に力強くなった。JAAGAはいろいろな理由からたいへん大事だと思えます。

冷戦後、いま我々が置かれている21世紀の安全保障の環境を考えますと、自由な国家として我々が成

功していくためには、かつての協力を全て超越するような優れた協力関係が必要です。その意味において大きく貢献するのが、この日米空軍友好協会であろうと思います。とくに安全保障を高めてくれる意味で友好協会の存在は非常に正しいのです。日米の安全保障が強化されれば、地域の安全を高め、世界の安全をしっかりと保障するものだと思います。

私は40年以上軍人でした。40年も空軍の制服を着用するとは思いませんでした。5年ぐらいにしようかと思っていたのですが、いろいろ事情があって40年も続いたわけです。しかし、この40年米軍に勤務したことは、非常な特権であったと思います。個人を超えて、国に対して尽くすということ。これは皆さまも同じお気持ちでしょう。

最近の4年はとくに興味深い時期でした。9月11日の同時多発テロのあと議長になったことが、次の4年の我々のすべての行動、私の生活を大きく変えました。4年間、その問題をよく研究し、それなり

に結論を考え付きましたので、それを皆さんと分かち合いたいと思います。私は政治家でも政府の人間でもありません。今から申し上げることは、私人としての私の考えで、あくまでも私の責任で申し上げることです。

タイトルのWWX (World War X) の話をしたいと思います。世界大戦は第1次、第2次で知られていますが、ここでXを使ったのは第3次ということではありません。そもそもこれまで国際社会が経験したことのない紛争を考えなければならないという意味です。通常兵力の3軍が戦うのではなく、もっと微妙な紛争と言えます。

よく見ていた方は覚えていらっしゃると思います。1998年にオサマ・ビン・ラディンが、アメリカ、そして西洋に対して宣戦布告をしました。自由を愛する人、民主主義を愛する人に対する戦争です。東アフリカでアメリカ大使館が爆破され、イエメンのアデン港で米海軍の駆逐艦コールが襲撃されました。そして1993年、第1回目の世界貿易センターの爆破未遂事件があったのです。それらは少なくとも我々アメリカ国民の心理に影響しましたが、本当の脅威かという、「何かいやなことだな」という程度でした。しかし、2001年の9月11日に本物の脅威になりました。ペンタゴンと貿易センターへの攻撃で本当に現実のものに感じられるようになったのです。

敵—アルカイダ、あるいはもっと広く暴力的な過激主義派—による攻撃に対して、当初のアメリカ政府等の対応は、敵の目には弱く映ったと見られています。敵は、アメリカの文化は、対応が弱いと見なしたのです。そこに9月11日の同時多発テロが発生するわけです。

当日、私は連邦議事堂で上院議員と面談をしていたのです。二つ目のタワーが破壊された時です。皆さんもご存知のエバハート将軍がノラッド（北米防空司令部）から電話をしてきて、「ほかにも複数のハイジャックのコードが入っている。全機着陸させるようFAAに連絡することにした。状況の解明はその後をしたい」ということでした。当時はヒュー・

シェルトン氏が議長でしたが、訪欧中でしたので、副議長の私は車でペンタゴンに戻りました。その車中でペンタゴンもやられたという連絡を受けたのです。ワシントンのポトマックに14番ストリートブリッジという橋があります。そこからペンタゴンを見ると黒煙が上がっていました。まずい映画を観ているような気分でした。非常に現実感がない、誰も想定しない出来事です。

この暴力的な過激主義派の脅威は、もちろん日本の視点、あるいは国際社会の視点と関連づけるようにして見る必要がありますが、少なくともアメリカから見ると、アメリカの生き方に対する脅威であるわけです。暴力的過激主義派は、テロリズムによって恐怖を植え付けたいのです。9月11日を思い起こしていただきたい。この東京にも、そして日本中にそれなりの影響があったと思います。恐怖が発端となっているいろいろな意思決定がされました。我々は、怖い時、恐怖を抱いた時は合理的な対応はできないということもあります。したがって恐怖ということが問題なのです。

もう一つは、例えばいまの北朝鮮の問題です。暴力的な過激主義、大量破壊兵器、ミサイル技術、さらには核分裂物質が組み合わされている。そして彼らは、そういう恐怖を世界に植え付けて、自らの思い描く世界を実現化しようとしている。それはとらえどころのない、しかし本格的な脅威です。

ブッシュ大統領は当日、ワシントンではなくフロリダにいました。ブッシュ大統領がフロリダからワシントンに帰り最初のミーティングが行われたのは、ホワイトハウスでした。まだその対応策は分かっていたのですが、そこで大統領から興味深い発言がありました。「我々の義務は国を守ることだ。友好国、同盟国を最善の形で守ることだ」。大統領は強い決意でおっしゃったわけです。

我々の戦略は攻撃と守勢です。守りとしては、まず、国土安全保障省を作り、北方司令本部という新たな統合司令本部を設ける。因みに、エバハート将軍が初代司令官を務めたのですが、将軍は本当に最適の人材でした。守りだけでは十分ではないことは、

みな分かっていました。したがって、私共は攻撃のほうも考えたわけです。まず最初がアフガニスタンです。

ご存じかと思いますが、最初、アフガニスタンで空爆を行いました。続いて、地上軍を投入して北部同盟と協力してタリバンに対する攻勢を掛けたわけです。しかし、ほかにも行いました。少なくとも敵は我々が本気だと気付きました。

特殊部隊を送り込み、CH47ヘリコプターを使って夜間に攻撃しております。人はいない、あるいは情報も集まらないとは考えましたけれども、どちらかというと彼らに対する心理的な攻撃ということであったのです。

もう一つ、戦略の一環として、長期戦略があります。まず暴力的過激主義を生み出す根源を攻めなければなりません。この戦力のベースになるのは、どちらかという外交と言いますか、経済的な問題、教育の問題、あるいは情報普及に関する問題です。軍にはあまり関係しないことです。短期的な戦略は軍に非常に依存しますが、長期戦略はそういうほかの要因に関係します。この戦略の展開には時間が掛かりました。これを冷戦と考えた場合、冷戦戦略の展開にどれぐらい時間が掛かったのか、それからまた、その遂行に日米はどれぐらい時間を掛けたのか。そういうことを考えますと、この例えも非常にうまく当てはまると思います。

暴力的過激主義は1日や1か月でなくなるわけではありません。根本的に世界を変える必要があります。そのためには軍も重要な役割を果たしますが、長期戦略においては軍のみが主要な役割を果たすわけではありません。また、一国で解決できるような問題ではありません。やはり国際社会が関係するわけです。だからJ A A G Aも重要なのです。なぜなら協力を育むからです、

どうして我々はこういうことに心を砕かなければいけないのか。いまは非常にグローバルな世界ですから、ニューヨーク、マドリッド、ロンドン、パリ、過激派によるテロがどこで起きるかは問題ではないのです。我々、みな必ず影響を被ります。ロンドン

での出来事が非常に恐怖心を駆り立てています。例えばビジネスマンも出張をやめるかもしれません。投資にも慎重になります。昨年7月にはロンドンの爆破事件もあり、56人も亡くなったわけですが、もしあれが放射能爆弾であったら、人が何十年も住めないような状況になってしまっていたわけです。そうなったら、私共の心にどういふふうな影響を与えるか、生活様式にどういふふうな影響を与えるか、ご想像いただきたいと思います。

それでは勝つためには何をすればいいのか。やはり国際社会が緊密な協力をやるべきだと思います。それも非軍事的な力が必要です。もう一つ必要なのは、忍耐強さだと思います。勝つためにはいい国際協力が必要ですし、忍耐強さも必要です。また、勝つための意思も必要です。単にアルカイダだけではなくほかの過激主義者に対しても言えますが、やはり勝つ意思が必要です。民主主義国に勝つ意思を喪失させたい。勝つための犠牲はあまりにも大きすぎると思わせたい。それが向こうの考え方です。

皆さんご関心があるかと思いますが、アメリカの軍がどういふ状況にあるのかということについてお話ししたいと思います。

ご存じの方もいらっしゃると思いますが、去年の8月、私共は日本にまいりました。世界中をまわって、できるだけ多くのアメリカの兵士を見たいと考えたわけです。私の顔を見てもしょうがない。あるいは私の妻を見てもしょうがないと普通の人は思うでしょうから、二人のコメディアンとスポーツ選手も連れて行きました。まず、ドイツに行きコンボを経てクウェートにまいりました。10日間で18回のショーをやって、2万5千マイル移動しました。1万5000名ぐらいの兵士に会ったでしょうか。その中には同盟軍の人もありました。クウェートで壇上に立って会場を見渡すと、席1列に砂漠用の迷彩飛行服を着た日本の空自の方々がいらっしゃいました。イラクで任務に就いている陸自の後方支援をしているC130のクルーの方々です。そういった方々を見られて本当に良かったと思います。ちょうど韓国軍の隣に座っておりまして。韓国軍もC130を運用してい

たわけです。世界は、私が日本を離れた後の10年間で非常に変わるのだなと思い、大変嬉しく感じました。幾つかの場所に行きましたが、非常に素晴らしい経験でした。

イラク、アフガニスタン、アフリカの角のジブチにも行き、それから、韓国、日本の横田、三沢、ハワイを回ってアラスカに行ったわけです。

アラスカからの帰路、同行した記者と話し合いました。彼は自分の見た兵員の士気について、「なかなか良かった。米軍は何を期待されているか分かっている。任務も理解しているようだ。非常にポジティブに考えている」と言っておりました。これはアメリカの軍人を知っていれば分かっていることなのですが、人口3億5000万人のうち、軍人と付き合いのあるアメリカ人は240万人ぐらいです。非常に少ない。ですから、報道だけに頼っていると、男女の兵士は抑えつけられているのではないかと思うかもしれませんが、実際に言葉を交わしてみると逆の印象だということなのです。

バグダッドの8月はいつも暑く、ほこりだらけです。防弾着を着てM16を抱えた米国陸軍の若い女性が来ました。通常、こういう時は「お勤め、ご苦労さん」と言うのですが、彼女の場合は私が言う前に向こうの方から、「イラクで従軍する機会をありがとうございました」と言ってきたのです。私は多少訝ったわけです。そんなことを彼女が言うとは思いませんでした。そうしたら、「私は州兵です」と彼女は言いました。「国内の任務もそれなりに重要だったけれど、いまこのバグダッドで本当に意味のある重要な仕事をしていると実感しています。この任務は必ず成功します。だから、その任務に就く機会をありがとうございます」。分布曲線で示すと、このような気持ちが平均的なものです。どこにでも行く、何でもするという、分布曲線の両端の人達ではなく、普通の兵員の気持ちなのです。これには私もうれしく思いました。それは米軍幹部だけでなく、下士官の指導力に負うところが多いと思います。日本の自衛隊同様、これは米軍としても重要視していることです。

ここにお集まりの皆さんは半数以上が日本の方です。デビッド・マッカラフの『1776年』という本はお読みになっていないと思います。昨年出たばかりの本で、英国の植民地から独立を目指して戦ったアメリカ史における激動の時期の話です。アメリカ人としてはジョージ・ワシントン将軍にしたかった。しかし当初、将軍としてはあまり優れていなかった。ボストンで敗れてニューヨークに行き、ニューヨークでも負けて後退して、東岸をずうっと下がって行きます。そして年末になって、ニュージャージーのトレントンというところで奇跡的に勝利を収めるわけです。その時だけが希望の時でした。7月には独立を宣言します。これは当時の議員がかなり楽観視をしていたということです。それから、軍勢もボストンでは何十万もいたのが数千人に減っていました。それでも軍を信頼していたということだったのでしょ。それが1776年です。これは別にアメリカ史だけのことではありません。我々全員が学ぶべき教訓かと思えます。

実は私は、デビッド・マッカラフという著者とも奥さんとも『1776年』についていろいろ話をしました。この本で何を言いたかったのか聞きましたら、「犠牲とか、勇気とか、アメリカ史の一端としていろいろ知らせたかった。しかし、なんといっても重要なのは、独立宣言であれ、米国憲法であれ、その後つくられた権利章典であれ—日本の憲法にも言えることですが—それを実現させるために人が犠牲になる意思がなければ全く意味がない。それは軍事的な犠牲ということだけではありません。もちろんこの部屋の我々にとって最初の犠牲は軍人としての犠牲であり、血を流すこともありますし、最終的には究極の犠牲を払う人もいます。しかし、我々の生活をいまのまま維持するためには、社会の一員として、新しい脅威に対しては犠牲が必要です。世界がこのまま続くという保証はありません。東京の市街が常に安全であるとは言えないわけです。こうあるべきだと神が言うわけでもありません。教師、医療従事者、いろいろなレベルで犠牲を払う気持ちがなければ、これは維持できない生活なのです。そ

れが『1776年』の話です。

いま民主主義が広がっています。しかし、日本から近いところでまだまだ冷戦の残滓が一つ残っているとあります。そして最高指導者がきちがいじみたことをしようとしています。せっかくの自由を堅持するためには、我々全員がもっと犠牲を払い、更に多大な努力を払わなければならないのではないのでしょうか。

どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

(文責、遠竹理事長)

竹河内会長によるマイヤーズ氏の紹介

マイヤーズ大將は、皆さんにとって、大変馴染みの深い、懐かしい方で、また、JAAGAにとりましても大変関連の深い方です。10年前、このJAAGAが発足する直前まで、横田基地で在日米軍司令官として勤務しておられ、発足にあたっての助言と協力を頂いています。現在もJAAGAの名誉会員となって頂いています。本日は、大変お忙しいスケジュールの中から、JAAGAのこの講演のために来て頂き、本当に有難いことだと思っています。

大將のご経歴は、皆さん十分ご承知とは思いますが、簡単に紹介させていただきます。

マイヤーズ大將は、2001年、ちょうど9.11同時多発テロがあった月の翌月、10月1日、第15代の米軍統合参謀本部議長に就任されました。その後、アフガン戦争、イラク戦争と続きましたが、要職にあつて、大統領、国防大臣、安全保障会議等に対して、直接的な、最高の軍事アドバイザーとして大きな責任を果たしてこられました。

それから、4年間要職を全うされ、昨年9月30日に統参議長の職を終えられました。

マイヤーズ大將は、実は、日本との関わりもたくさんあり、若い頃は、戦闘機操縦者として嘉手納、あるいは、横田で勤務されていますし、先程言いました様に、1993年から96年にかけては、在日米空軍司令官、兼ねて、第5空軍司令官を勤めておられます。この職を終って1年後には、太平洋空軍司令官として、またこちらに帰って来られ、1年間の勤務

をされております。

大將は、太平洋、日本地域の事情について大変詳しく、そういう方が米国の統合参謀本部議長として活躍されたことは、我々にとってもうれしく、大変誇りに思います。

本日は、「暴力的過激主義の脅威」ということでお話を頂きますが、ちょうど、マイヤーズ大將が4年間の統参議長を勤めておられるときは、米軍のトランスフォーメーション、テロとの戦い、大量破壊兵器拡散の防止等を含め、米国の軍事戦略が大きく変更する時期であり、大將のご経歴、ご経験、ご見識から、大変面白い話が聞けるのではないかと期待しています。



President Takegouchi's speech

感謝状贈呈式における竹河内会長挨拶

本日は、ご多忙中のところ、遠くはアメリカの方から、この感謝状贈呈式にご出席を頂き本当に有難うございました。

平成8年に創立されたJAAGAも今年で10周年を迎えることができました。現在は、会員が300名を擁するまでとなっております。

只今、皆様方に、JAAGA10周年行事の一つとして感謝状を差し上げたわけでございます。皆様方のこれまでのご功績に対して改めて感謝を申し上げる次第でございます。

もとより、JAAGAの活動は、ボランティアでありまして、皆様方の真摯なる熱意、こういったものがないと成り立たない組織であります。そういう意味で、今日表彰させて頂いた皆様方につきましては、大変ご尽力頂いたというふうにいる次第であります。

JAAGAは、必ずしも派手ではございませんし、大きなものではございませんが、今後とも、この種の活動を続けまして、日米のエアフォースが今後とも友好親善、相互理解を深めていくように努めてまいりたいと思っている次第であります。引き続きまして皆様方のJAAGAに対するご理解を頂くとともにご協力ご支援の程、お願い申し上げまして、感謝状贈呈のお祝いの挨拶とさせていただきます。

祝賀会における竹河内会長挨拶

主催者を代表いたしましてひとことご挨拶を申し上げます。

本日は、多くのご来賓のご臨席を得まして、このような10周年のお祝いを実施することができ、大変うれしく、かつ、光栄に思っております。

この祝賀会の前に、多くの方々にご参集頂きましたが、マイヤーズ大将の記念の講演会を実施いたしました。大変興味深く、色んなお話を聞かせて頂きました。

それに引き続きまして、JAAGAとして、JAAGAの設立、発展に寄与されたの方々に対する感謝の意を表するということで、日米4名の方と、3法人の方に、感謝状を贈呈させていただきました。

さて、10周年ということでありまして、若干、設立当時のことを振り返って見たいと思います。JAAGA発足の由来は、航空自衛隊のOB有志がともに空に生きた者として、航空自衛隊と米空軍の関係強化のために何かしたいという強い望み、希望を持ったことが最初の切っ掛けであったと伺っております。もちろん、今から10年前1996年当時、米空軍と航空自衛隊は大変密接なる関係に既にあったわけですが、JAAGAを考えた人たちには、今後とも米空軍、航空自衛隊の関係は更に強化する必要があるという認識があったのだと思います。

また、あえてその時期にJAAGAの設立を考えた背景には、当時の国際情勢があったのだと思います。ちょうどJAAGAが設立された年、1996年4月には、クリントン大統領、橋本首相による新しい日米安全保障共同宣言がなされましたし、この年の秋には、

新しいガイドラインにより、日米安全保障体制の信頼性の向上及び周辺事態の協力等について新たに定められまして、日米関係が新たな段階に入った時期でもあります。

それからの10年間、JAAGAを作った人たちが予想したように、航空自衛隊と米空軍の関係強化が必要な、かつ、重要な事案が起きてきました。すなわち、2001年9.11、同時多発テロが起き、自衛隊が初めて海外でテロとの戦いのための活動をしました。さらに、2003年には、イラクへの武力侵攻に伴い、イラク特措法により自衛隊が活動することになりました。航空自衛隊、他の自衛隊もワールドワイドに活動するための活動基盤は持っていませんでしたし、その経験も知識もなかったわけでありましたが、米軍、米空軍の多大なるご支援、ご協力があって、現在も成功裏に活動を続けているところであります。

私どもJAAGAというのは、今後とも米空軍、航空自衛隊の関係強化につながるよう最大限の努力をしてみたいと思っております。皆様にもご理解、ご協力をお願いして参りたいと思っております。

我々がその活動をやる時、いくつかのキーワードを頭の中に入れております。

一つ目は、我々の大切な米空軍をパートナーとして大切にしていくということ、二つ目は、故郷を離れて派遣されている米軍人は、日本の防衛のためにもなっており、そういう軍人の皆様に感謝の気持ちを持つということ、最後は、我々の活動は全てボランティアであり、献身的な努力が必要であるということでもあります。

今後とも、JAAGAの活動にご理解を頂きますとともに、多くの方のご協力、ご支援の程お願い申し上げます。挨拶に代えさせていただきます。



Memorial reception

'06 コープ・サンダー訓練参加部隊を激励

—米国アラスカ州における訓練に激励金—



Cope Thunder Exercise 2006

平成18年度のコープ・サンダー訓練は、7月21日（金）～8月5日（土）の間、米国アラスカ州アイルソン空軍基地及びエレメンドルフ空軍基地並びに同周辺空域において実施された。

航空自衛隊からは、第6航空団飛行群司令福島1佐を訓練指揮官として隊員約200名、第6航空団からF-15J/DJ型機6機、携SAM追従訓練機材6セット、警戒航空隊からE-767型機1機がそれぞれ参加した。F-15は本邦・アラスカ間の渡洋に際し、米

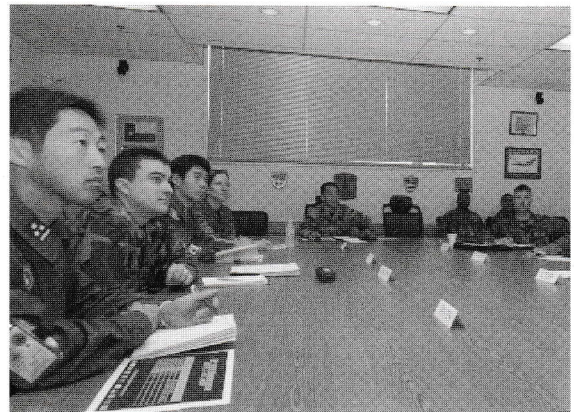
空軍の空中給油機の支援を受け移動し、アラスカにおいては、恵まれた訓練環境の下、E-767とともに防空戦闘訓練を、また基地防空部隊は基地防空戦闘訓練を実施し多大な成果を収めた。

JAAGAは訓練視察をされた彌田航空総隊防衛部長に訓練激励金を託し激励した。激励金は訓練間、日米の交歓に活用された。

(石黒常務理事記)



Air refueling by USAF tanker



Briefing

3回目の青森「ねぶた祭り」参加を支援

—三沢支部が米軍三沢基地軍人・家族を招待—



Nebuta festival 2006 in Aomori

8月5日(土)、三沢支部は、恒例になった米軍三沢基地の軍人及びその家族の青森「ねぶた祭り」への招待行事を実施した。今年で第3回目の本行事のため、1ヶ月前から米軍担当者及び支援団体等と3回の調整を実施し当日を迎えた。

例年の通り、今年も参加を申し込んでいない軍人等が集合場所に現れ、参加希望を申し込んできた。幸運にも欠席者があり、バスの座席に余裕ができたので当日の申込者を受け入れ、合計が43名(引率者を含み、大人33名、子供10名(将校6名、下士官13名、家族))となり、15分遅れの午後3時丁度に三沢基地を出発した。

出発後、車内でJAAGAからピザ及びジュース等を提供していること、平素のJAAGAの各種活動状況等を説明し当協会のPRを実施した。彼等の反応から一般の軍人達にはJAAGAそのものが十分に認知されていない様に思われた。

青森市内のホテル到着時には青森国際ボランティア協会会長及び同会員の皆様の出迎えを受けた。ホテル前の歓迎場所において同協会に対し感謝の印と

して三沢から持参のシナモン・ケーキ等をJAAGAから贈呈した。その後、ホテル内の部屋に案内され、ハネト衣装への着替えを始めた。43名の着替えのために12名の着付け係に支援をいただいた。アメリカ人全員が着物を着るのが初めてであり、また大柄な人も多く日本人の着付け係が一人では対応できず、一人に対し二人の着付け係が対応する場面も見られた。着替えが終わった人達はお互いに記念撮影をしていた。

全員の着替えが終了した時点でホテルのロビーに集合し、「ねぶた祭り」の注意事項等を説明して出発場所へ繰り出した。外国人がハネト衣装を着ているのが珍しく、移動途中で観光客から記念撮影を求められ一緒に撮影をしたり、また祭りの屋台の店員から声を掛けられ無料で商品を貰ったり、出発地点への移動がスムーズにできずに40分もかかるほどの人気であった。その間、青森市の担当者と私達は彼等が迷子にならぬように行ったり来たりしながら彼等を誘導した。おかげで日頃の運動不足が解消できた。

19時10分、花火の合図で「ねぶた祭り」が始まり、

大きな太鼓の音と笛の音色にのって地元の人達と一緒にになり、また沿道の観光客からの声援を受けハネトの輪を一段と大きく広げ、祭りを大いに盛り上げた。約2時間の祭りを十分楽しんだ様であったが、激しい動きはエアロビクスとなり、かなりのダイエット効果があったようだ。

21時10分、祭り終了の花火を合図に、興奮の余韻を残し参加者全員はホテルへ引きあげた。汗で濡れた



Nebuta dancing

衣装を乾いた私服に速く着替えるように促しつつ、帰りの支度をした。帰宅準備完了後、青森国際交流ボランティア協会の方々の見送りを受け帰途についた。

帰路は予想どおり交通が渋滞し、三沢基地には23時45分に到着した。バスの中では参加者全員が来年もまた参加したい、と話が盛り上がり、「ねぶた祭り」参加ツアーは大好評のうちに事故もなく終了した。

本事業は昨年度まで三沢基地准曹士会主催で実施されてきましたが、本年度からJAAGAの事業として実施することとなりました。今回、青森市役所国際交流課の皆様にはラ・プラス青い森ホテルの借上げ、青森国際ボランティア協会の皆様からは「ねぶた祭り」衣装の提供及び着付け等多大のご支援をいただきましたことを、紙上をお借りしてお礼申し上げます。
(山本三沢支部事務局長記)

'06米空軍三沢基地スペシャル・オリンピックス

— 当協会から寄付金を提供 —

9月2日(土)、晴天で清々しい体育日和の米空軍三沢基地において、青森県上北郡七戸町の「もみの木学園」で寄宿生活をしている56名の生徒を迎え、22回目の米空軍三沢基地スペシャル・オリンピックスが開催された。

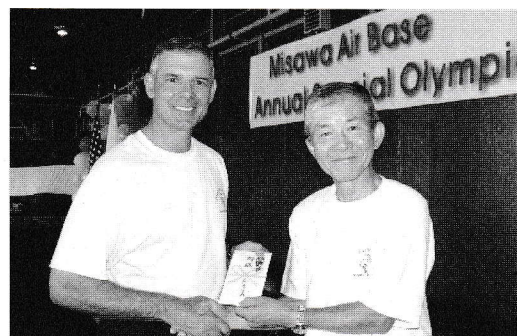
大会では生徒一人に対して米軍から3名又は4名のエスコートが就いた。大会に臨み興奮する子供もいたが、世話役と通訳ボランティアが施設の介助職員達と協力して開会式に臨んだ。

米空軍三沢基地司令官アンジェラ准将が開会を宣言し、競技が開始された。競技はエプロン地区での50m及び75m走、格納庫内でアメフトのボールを標的の穴に投込むもの、同様にフリスビーで標的の穴を狙うもの、サッカー・ゴールへのシュート、ミニ・ボウリング、バスケット・ボールのシュート競い等で、競技者が上手にゴールすると大きな賞賛と歓声が各所であがった。

昼食時には、三沢基地の軍人及びその家族で構成

される和太鼓のグループによるアトラクション等があり、大会を盛り上げた。競技終了後、参加した生徒全員に対し表彰が行われ、一人一人にメダルが贈られて閉会となった。午後2時前に往路と同様、3台のバスに分乗して生徒達が帰途につき、2006年度米空軍三沢基地スペシャル・オリンピックスは終了となった。

本年度から当協会は本大会に寄付金の提供を開始した。
(小澤三沢支部長記)



Brig.Gen. Angelella & Mr. Ozawa

第374任務支援群司令官リー O.ワイアット大佐着任

— 理事等が交代式に列席 —



Change of command ceremony

7月13日（水）午前9時から横田基地第15格納庫において第374空輸航空団司令官グッドウィン大佐が執行官となり多くの招待者及び家族の見守る中、第374任務支援群司令官交代式が厳粛に執り行われた。ストーリー大佐の後任には、米国バージニア州ラングレー基地から航空戦闘軍サービス運用部長兼施設部長であったリーO.ワイアット大佐が着任した。

JAAGAから石川会員、山岡会員、越智、榎、坂東の各理事が列席した。日米両国旗、軍旗の登場、両国国歌の吹奏の後、グッドウィン司令官が離任するストーリー大佐の功労に対して勲章を授与した後、「今日、新しい司令官を横田基地とその地域社会に迎えることができました。私の願いは皆さんが前任のストーリー大佐と同様にワイアット大佐と親しい友好関係を築くことです。」と新着任のワイアット大佐を紹介し、指



Command flag to Col. Wyatt

揮官旗を手交して指揮権の継承を行なった。

スピーチ台に立ったストーリー大佐は、「2年に渡り、任務支援群下にある施設中隊、通信中隊、任務支援中隊、憲兵中隊、装備即応中隊、契約中隊、サービス部のたくさんの皆さんから協力を得て責務を果たすことができました。皆さんの支援に感謝します」と語り、続いて登壇した新任務支援群司令官のリー・ワイアット大佐は「任務支援群の指揮権を頂いたことを大変光栄に思います。どこにもこれ以上の群はありません。妻シェリーと私は米空軍の最高の航空兵と共に働くことを楽しみにしています」と抱負を述べた。



Col. Wyatt and JAAGA members

式典終了後、将校クラブにおいて歓迎レセプションが行なわれ、基地主要将校と多くの招待者との和やかな交歓の場となった。席上、JAAGA10周年記念行事に出席して頂いたグッドウィン374空輸航空団司令官は勿論の事、リハイザ第5空軍副司令官、ブラウン在日米軍参謀長、ジェームズ・ロイ第5空軍先任空曹等多くの方からマイヤーズ大将の講演を中心とした行事全てがとても素晴らしかったとの賞賛のコメントを頂いた。

なお、前任のストーリー大佐はアラバマ州マックスウェル空軍基地にある空軍大学校の教官に補職されました。 (榎 常務理事記)

平成18年度「新生つばさ会/JAAGA 訪米団」に参加して

—AFA年次総会に併せ、ネリス空軍基地等を訪問—



JAAGA delegation at Pentagon

今年度の「つばさ会/JAAGA訪米団」は竹河内捷次会長を団長に山口利勝副会長、越智通隆理事、岡本智博会員と筆者の計5名で9月17日から28日までの12日間、ワシントンDCでのAFA年次総会の参加に併せて太平洋軍、太平洋空軍司令部、ネリス空軍基地及び国防省、日本大使館を訪問した。その間、多くの現役高官とともに退役されたJAAGA名誉会員との交流を通じ日米相互の親善と更なる友情を図るとともに、米軍等の現況及び趨勢を把握することができた。

AFA年次総会に先立ち23日(土)、JAAGA創設10周年を記念して我々訪米団と名誉会員との記念パーティを開催した。米側からは、所要で急遽不参加となったディビス大将及び当日ハワイで空軍長官を迎

えてのエアフォース・ボール出席のために不参加となったヘスター大将を除き、方々の名誉会員、即ちホーリィ大将、マイヤーズ大将、エバハート大将、ホール中將、ワスコ中將ご夫婦、更にラスベガスからマギー・サルース女史、また日本側からは在ワシントンの正副航空防衛駐在官ご夫妻も参加していただいた。パーティは集まった方々が久々の出会いにお互いの健康を喜びあうことから始まった。竹河内会長の挨拶、10周年記念品の贈呈の後は楽しい談話となり、JAAGAが培った10年の歴史を再認識させられた。

現役のヘスター太平洋空軍司令官ご夫妻にもハワイとワシントンのホテルで面談することが出来、今回の10周年記念行事の節目として大きな成果であっ

た。

最近入会者が減少傾向とはいえ、会員総数13万人を有するAFAは本年度で創立60周年を迎え、機関雑誌「Air Force Magazine」を発刊する退役、現役を含めた全国組織ですが、総会開始のセレモニーや会場ホテル内に設置された軍事産業界の多数の展示物を見てそのAir Powerの大きさを感じとることが出来た。

現在米国軍隊では大規模な組織改革が進行している。従来の任務に加え世界的な大規模災害対処、国家の枠組みを超えたテロ対策、大量破壊兵器の拡散等に対応する統合運用および多国籍軍運用に迅速に対応しなければならず、イラク等での作戦をしながら国防総省から前方展開部隊まで一丸となって改革に取り組んでいる姿を垣間見ることができた。また空自に関係するミサイル防衛、米軍基地再編、次期戦闘機選定、日米共同訓練等の他、豪、英、加国のC-17の購入に関しても国防省のジョン・ヒル氏、空軍省国際部長のブルース・レムキン氏、空軍参謀

本部のA3・ゴーレンス少将、A5・ニュートン少将、太平洋軍副司令官のリーフ空軍中将等から貴重な話を聞くことができた。さらにネリス空軍基地ではイラクで活躍する無人機プレデターや母基地のサンダー・バード等の説明を受け見学することができた。

歴代司令官の名誉会員の他にもワシントンでは元三沢基地司令であった空軍参謀本部A8部長のウッド中将、ハワイではPACAF副司令官のアターバック少将(10/6付で13軍司令官中将)、PACOM作戦部長のアトキンス少将と面談することで、また若手将校の中でも日本での交換幹部経験者等が一様に日本に対して親しみと感謝の気持を持っており、JAAGAが従来から在日米空軍に対して実施している支援活動等が着実に実を結んでいることを実感した。最後に今回の訪米に際して各方面で協力して頂いた関係者に紙面をお借りして心から感謝の意を表します。

(清水常務理事記)



Honorary members & JAAGA delegation in Washington DC

'06横田基地日米友好祭

—レセプションに、理事等が出席—



Col. Goodwin and JAAGA members

横田基地の日米友好祭（Yokota Air Base Japanese-American Friendship Festival 2006）が8月19日（土）、20日（日）の両日に亘り行われた。屋内、屋外のステージでは、日本の太鼓・踊り、そして、アメリカのポップ・ロック等の演奏が行われた他、様々な催し物及び航空機の展示があり終日多くの一般市民が訪れていた。

20日（土）、午後1時半から下士官クラブに於い

てレセプションが開かれ、グッドウィン横田基地司令の招待によりJAAGAから越智、阪東、源の各理事が出席した。

レセプションの中でグッドウィン大佐は、「本日は日米友好祭そしてレセプションにお越し下さいまして有難うございます。50年以上にわたり日米友好を深めてきました。この基地で沢山のものを見て、聞いて、アメリカの伝統を楽しんで下さい。新しい友人を作り、また友好を深めて下さい。横田基地の使命に対する皆様からのご支援は太平洋地域での平和と安全に欠かせないものです。本日は、横田基地において頂き有難う御座います。素晴らしい一時をお過ごし下さい。」と日本語で挨拶して拍手喝采を浴びた。

レセプションは、全員がカウボーイ・ハットをかぶり、また空軍バンドのウェスタン生演奏もあり、ウェスタン調で盛り上がり、歓談の輪が幾所にも出来、終始和やかな雰囲気であった。（源 常務理事記）

横田基地エア・フォース・ボール'06

—米空軍創設59周年記念行事に、理事等が参加—



Air Force ball at Yokota AB

9月9日（土）、横田基地において第374空輸航空団司令グッドウィン大佐の主催により、米空軍創設59周年を記念してのエア・フォース・ボールが実施された。JAAGAから越智、阪東、源の各理事と会員の山岡氏が参加した。また、航空自衛隊からは

近隣の入間・府中の各部隊の准曹士先任等も招待されていた。

エア・フォース・ボールは、外気温30度を越える残暑の中、18時過ぎに始まり、最初にセレモニーが行われたあと、ボール（舞踏会）の趣旨に沿ってパーティとなった。セレモニーでは日米両国歌と米空軍歌の斉唱、米空軍創設を記念して作成されたバースデー・ケーキへの入刀、そしてグッドウィン大佐の歓迎挨拶（ショート・スピーチ）が行われた。その後、生バンドを背景にダンスが始まり、セレモニーの場はダンス・パーティの会場となった。パーティ会場は数箇所に分かれ、ディスコ風の会場もあり、それぞれの音楽に合わせ500人を超える大勢の参加者がダンスと懇談等を楽しんだ。

（源 常務理事記）

平成18年度、賛助会員の横田基地研修

—法人賛助会員20名、個人賛助会員6名参加—



Associate members visit Yokota AB

平成18年10月11日（水）、JAAGA賛助会員の米軍横田基地研修が実施された。今まで正会員の横田基地研修は行われていたが、賛助会員を対象としたものは今回が初めてであった。研修団長を市川雅也氏（三菱重工）とし、法人賛助会員20名、個人賛助会員6名、そしてJAAGA役員では榎、宇都宮、高橋、坂東、源の各理事が参加した。

JR福生駅に10時集合であったが、早くから集合が完了し、本研修に対する参加者の関心の高さが感じられた。予定通り10時半から第5空軍司令部において、第5空軍作戦副部長マック・ウィリアム大佐を長とし関係参謀も多数陪席する中、第5空軍の概要ブリーフィングが行われた。

第5空軍の任務・組織の概要から始まり、コープ・サンダー演習、イラク復興支援活動、インド洋津波救援活動等においても日米の強い同盟関係が証明されていること、在日米軍が地域社会にも貢献してい

ること、そしてテロリズム、北朝鮮等の潜在的脅威等について説明がなされ、米軍の前方展開が抑止力となり、この地域における平和と安全を保つために寄与していることが強調された。また、第5空軍の各航空団の戦闘能力の概要が説明され、常に高い戦闘能力態勢を維持していること、更には将来のこととして日米再編協議合意事項に関連して、横田管制空域の柔軟な使用、分散訓練の構想、航空総隊司令部の移転、BMDに関する説明がなされた。そして



Command briefing at 5AF headquarters

最後に、日米同盟が極東の平和・繁栄・安全のために不可欠であること、日米関係・米空軍と空自との関係が重要であることが強調された。

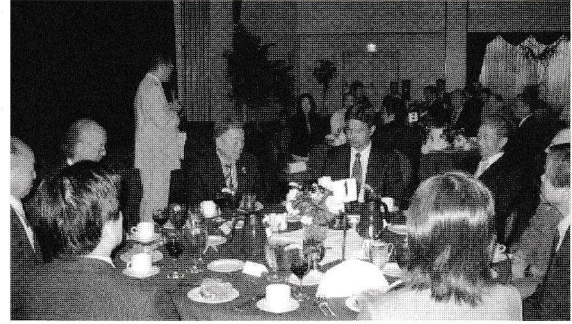
賛助会員はこれらの説明を大変興味深い様子で聴きいており、質疑応答では日米同盟の重要性、周辺国の脅威等に関する質問を積極的に行った。これに対する作戦副部長あるいは関係参謀からの適切な応答もあり、日米安全保障体制の重要性を再認識するのに極めて有意義なブリーフィングであった。

その後、12時から将校クラブで昼食会となった。5つに分かれた各テーブルでは、それぞれ通訳が配置されたこともあり、会話が弾み友好親善の1時間はあっという間に過ぎた。また席上、JAAGAからの記念の盾が米軍側に手渡された。

食事後は、ランプ地区にあるC-130・C-21・



C-21 at apron



Luncheon at Yokota officer's club

UH-1の各航空機を見学し、続いてバスに乗り乗しての基地内ツアーが行われ、広報担当者から主要施設の説明を受けた。最後にAFN (Arms Forces Network) の放送施設を見学 (この間、研修団長は第5空軍副司令官を表敬) して研修は終了となった。

10時から15時半までのタイトなスケジュールであったが、研修の目的は十二分に達成できた。特に司令部参謀の生の声を聞き、日米関係、特に米空軍と空自との関係の重要性を研修者が肌身で感じ取れたのは賛助会員にとって極めて有意義であったものと確信する。研修者からは、「日帰りであったが研修内容が充実しており、日米の同盟の重要性を良く理解できた。」との多くの声が聞かれた。

(源 常務理事記)

リバティ号だより (7月21日)

昨年11月号にて皆様に御報告して以来、早くも8ヶ月が経過し、我が艇リバティは、その間に、米合衆国カリフォルニア州ニューポートビーチから、パナマ共和国パナマ市のバルボア (パナマ運河太平洋側の入口に所在) までやって来ました。

メキシコに入ってからパナマまでの海路は、約3000浬と、東京からハワイまでの距離に近く、長い旅路でありました。途上訪問した国は、メキシコ、エクアドル、コスタリカで、(ガテマラ、ホンジュ

ラス、ニカラグアは行程の都合上訪問は省きました。) それらの訪問国で停泊した泊地は約25箇所です。(うち何箇所かの泊地では錨泊のみで上陸していない所もあります。) また、言語は馴染み深い英語からスペイン語の世界に移り、素養の無い私としては、英語の中に時折「インポルタンテ」、「ネセシト」等スパニッシュ風の単語を織り交ぜ、あとは「ムーチョ」と「ポキート」程度の限られた武器とボディラングエジで肉弾戦に持ち込んでいます。戦果は、買い物等目標が単純明快な時にはなんとか80%以上の達

成率ですが、道を聞く等、少し複雑な場合は苦戦を強いられています。自然の豊かさがなんといってもこれら諸国の切り札で、多くのヨットマンもこの自然を求めてこの地域に入ります。人跡未踏と思しきマングローブに囲まれた入り江に、ただ一隻錨を入れ一週間二週間と寛ぐのが、彼等の喜びの一つのようです。我々日本人はこのような寛ぎ方に余りにも慣れておらず、3日もたつと飽きてしまうのが実情で、目下修行中です。

漁獲はメキシコに入った以降急激に伸び始めています。漁業活動は航海中は引き釣り、停泊中は銚子を持ってシュノーケリングですが、これまでに引き釣りの部でビン長マグロ、平アジ、鯛、シイラ、カツオを、シュノーケリングでは防大時代、走水海岸での自主訓練の成果を遺憾なく発揮して、鯛、TriggerFish (日本名?)、イサキ等をせしめています。

獲物「海の幸」は先ず刺身、次いで漬け、そして焼き魚あるいは煮魚とし、最後は干して、たしなみ、洋上での単調になりがちなメニューを長きに渡り潤わさせてくれます。

一方、市内の治安が悪いのもこの地域の特徴で、警察の全般防空の至らざるを、銃携行のガードマンで拠点防空している状況はこれらどの国でも共通の状況です。これら中米諸国のうちパナマが一番都会的ですが、それは限られた地域についてのみのようです。パナマの旧市街地でタクシーを探している際に地元の怪しい若い衆二人に付きまとわれガソリンスタンドのガードマンに助けを求め、事なきを得たような危うい治安の体験もしました。

昨年、国を出てから出会った日本のヨットは、我々と同時期に日本を出て現在もパナマのカリブ側にいる夫婦で世界周航中のニライ号と、単身世界一周中のアキツシマ号の2隻のみで、他は全て欧米諸国の船ばかりで、アジア系の船は皆無で、なんとも寂しい限りです。どうもセーリングは、特に渡洋セーリングは、全くといっていいほど欧米人の遊びのよう

で、「海洋国家」或いは「国際国家」として「海」で、或いは「海外」で稼ぐ日本としてはもう少しその余禄を追及して楽しみをも拡大して然るべきと感じています。このような背景から、航海間に出来た我々のヨット仲間は必然的に欧米人が大半です。

私の旅の楽しみの対象は、各地での知己を訪ねることと、セーリングを通じてのヨット仲間あるいは地元民との交流、それに観光だったのですが、ここで、先に述べたようなヨット仲間との交流を通じて得た新たな所感、“WILDNESS”(「野生」という日本語がいいのでしょうか?)ということについて述べてみたいと思います。これまでの私の欧米人とのお付き合いの相手は軍人が大半であり、彼等は総じて「お行儀の良い」人達で、人前でこの「野性」を直接見せるような機会は余りありませんでしたが、今回のクルージングの間、お行儀の多様な人達との付き合いからは、「野生」の片鱗を垣間見ることが少なからずありました。コスタリカのある静かな泊地で錨泊中、アカブルコから編隊で南下してきた我が「旗艦」“Starlet”に招待されて夕闇の中で歓談中、誰かが「留守のはずのLibertyに明かりが見えるぞ!」と云うのを聞き、リック「艦長」は「よし直ぐ行こう!」とキャビンに飛び込みマシェテ(山刀)をワシ掴みにして現れ、私とともにディンギーで約100メートル離れた我がリバティーに駆けつけました。結果的には誰もおらず船の背景のわずかな村の明かりのなせる業、であったのですが、この咄嗟の「やる気」は本物でした。海賊対策は我が船でも、米国からの南下中考えざるを得ない雰囲気になってきておりますが、私は、愛すべき日本国憲法の本質から戦わざる方針でいた(本当は命が惜しいだけ)のですが、この「やる気」に接し、「やるべきはやる。」場合をも想定するに至っております。

また、ここでリック船長と魚突きに出かけた際、暑い岩場の上を裸足で移動する状況下で、スタスタ歩くリックに私は足が熱い痛いしでどンドンオイテキボリになってゆく場面がありました。彼は、

「俺は日頃船上では全て裸足で活動してるから平気」とのことで、これは基本的にデッキ上では靴履きを原則とする我々の常識を覆すもので、「危なくないの?」との質問には「多少の怪我はしょっちゅうしてるけど裸足の方が快適だし何かとためにもなるから」、との答えでした。以後出会うヨット仲間の履物には注意してましたが、船上を裸足で行動することは、とても常識的で、陸上でも裸足で歩いている仲間が多いのに改めて驚いた次第です。帆船時代からの常識なのかも知れません。(そういえば映画「カリブの海賊」の船乗りは大抵裸足だったかな?)

先日パナマに到着した海上自衛隊の練習艦隊の一般公開に各国からのヨット仲間10人程を誘って訪問した際、その中のアメリカの14歳の少年が裸足で参加したのを見て、案内の海曹兄が私に、「彼は靴をどこかで忘れてきたのですかねー?」と質問してきました。「彼はいつも靴を履かないんだよ。」と答えたところ、「危なくないですかねー?」との心配を洩らしましたが、「いつも裸足で、路上のガラス瓶のかけらを踏んでも平気で居るから大丈夫でしょう。」との私の答にしょうがなく納得していました。

今、「夏休み」で私は船をパナマに置いて一時帰国していますが、戦後の(いや戦前からかも?)日本人に欠如しているものの一つが、この「野生」ではないかと実感しています。「サッカーをやっても勝てないのはこれだな、まして、戦争にはこれでは

勝てないよな。」とか感じる七夕の夕刻なのであります。私はこの“Wildness”を、自衛官に求められるべき資質として教わった記憶はありませんが、皆さんは如何でしょうか? 防衛大での「棒倒し」なんかはこれにあたるものでしょうか? 戦闘要員として本質的に個々の強さを求められ、そして任務は今後益々多様化し、また国民の期待はより具体化してゆくであろう自衛官に「野生」をも育てゆくべきではないのでしょうか? またそれを、野性味に欠ける日本社会の中でどうやって具現すればいいのでしょうか?

さて、威勢よく世界一周を目指して出たリバティー号のこれからですが、このたび、我々の「身の程」をわきまえ、これ以上兵站線を不用意に延ばさず、太平洋に留まるべく方針変更を致しましたことを報告致します。ヨーロッパ、アフリカ等興味は尽きませんが、これまでの自分達での経験を踏まえ、欲張らず、ゆっくりとした旅路こそ我々の望んでいたもの、との旅の目的を再確認した結果によるものでもあります。南太平洋は世界のヨット乗りの憧れる「楽園」のようですし、また日米が鎬を削ったWWⅡ海戦の舞台でもあります。心して旅を続けたいと思います。

リバティー号 林 昭彦
(JAAGA 会員)



Captain of "Liberty", Mr. Hayashi (right, JAAGA member)

… 新入会員の紹介 …

1 正会員

氏名 勤務先	〒	住 所 (上段: 自宅、下段: 勤務先)
磯 貝 壽 夫	237-0064	横須賀市追浜町2-67
大 豊 建 設 (株)	104-8289	中央区新川1-24-4
伊 庭 春 樹	492-8411	稲沢市北島町小柳2-93
三 菱 重 工 (株)	480-0293	西春日井郡豊山町豊場1
木 村 貞 夫	901-0152	那覇市小禄752-1-301
双 石 芳 則	351-0114	和光市本町26-52
日本アビオニクス(株)	141-0031	品川区西五反田8-1-5
永 岩 俊 道	158-0081	世田谷区深沢2-19-20-405
原 田 千 敏	278-0026	野田市はない67-8-211
福 山 建 志	144-0034	大田区西糞谷 3 丁目3-4-303
日本航空インターナショナル(株)	144-0041	大田区羽田空港3-3-2
堀 好 成	162-0067	新宿区富久町12-1-2602
山 口 金 光	103-0024	中央区日本橋小舟町8-14-606
石川島播磨重工業(株)	135-8710	江東区豊洲3-1-1

2 個人賛助会員

氏名 勤務先	〒	住 所 (上段: 自宅、下段: 勤務先)
山 口 生 夫	227-0061	横浜市青葉区桜台1-31

3 法人賛助会員

法人名 代表者	〒	住 所
柏屋不動産 田中 讓	197-0011	福生市福生 5 6 3 番地
(株)ニライカナイ沖縄 牧野 信久	107-0062	港区南青山3-5-2-3F

会 員 募 集

JAAGAは、今年で創立10周年を迎え、更なる前進を目指して会員の会勢拡大に努めております。今期は関係各位のご努力で正会員9氏、個人賛助会員1氏、法人賛助会員2氏の計12氏の入会を得ることができました。

今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。

なお、個人会員の入会につきましては、次のとおりです。推薦若しくは情報提供を頂いた方には直接 会員担当の係から連絡させていただきます。

【入会資格】

正 会 員 : 航空自衛隊のOB

個人賛助会員 : 航空自衛隊のOB以外の方で、正会員3名の推薦が必要です。

【連絡先】

【郵便】 〒105-0004 東京都港区新橋5-25-1-3
日米エアフォース友好協会 会員担当行

【電話】 03-5400-4722 宇都宮 靖 (横浜ゴム(株))
03-3286-0339 新井 洋一 (新東亜交易(株))
03-3213-0270 鬼塚 恒久 (三井生命保険(株))
03-7616-4319 正岡 富士夫 (三菱重工業(株))